

マーク・トウェインとアメリカのナショナリズム

— *Roughing It* におけるインディアン像 —

中 島 好 伸

1

1885年に出版された *Adventures of Huckleberry Finn* (イギリスでは1884年) は、主人公であり語り手のハックがトムたちよりも先にテリトリーへ行くことを暗示して終わる (I got to light out for the Territory ahead of the rest)⁽¹⁾。テリトリーとは州へ昇格する前の準州を意味するが、舞台を4, 50年前の1830年から40年代に設定していることを踏まえると、具体的にこのテリトリーとは現在のオクラホマ州に当たる地域を指すことになる。1803年のルイジアナ購入以来、この地域はミシシッピ河以東のインディアンを強制移住させるための土地と構想され、30年代に入りアンドリュー・ジャクソンによりこの構想は実行された。すなわちハックが向かおうとしているテリトリーはインディアン・テリトリーのことであり、と考えてよい訳である。

しかし、この暗示は、ハックがどのような立場でテリトリーへ行くのかによって、作品の解釈が大きく分かれる基本的な問題となる。ひとつの読みはブーマー (boomer) としての読みである。合衆国政府は、インディアン・テリトリーへの強制移住を進める際、形式的にはあれ条約を結び、新たな土地の占有をインディアンに保証していた。ところが、新たな土地を求めた白人たちがこの条約を無視してインディアンの土地に流れ込み、その地を自分たちの土地と主張する。その結果インディアンは一層小さな保留地 (reservation) に収容されることになった。これが19世紀のインディアンの大きな流れであるが、この流れ込んで来た白人たちをブーマーと呼ぶ。南北戦争後、ホームステッド法 (1862) に刺激され、この流れは一層大きくなる。このような流れの中で、1876年から84年にかけて途中何度か中断しながら *Huck Finn* を書き上げたトウェインが、作品中にこのブーマーを書き込むことは十分考えられる。したがって、ハックをブーマーのひとりと読むことは十分可能であるが、こう読むことはアメリカ白人のナショナリズムになんら疑問を抱いていないハック並びに作者マーク・トウェインをそのまま承認することである。しかし、南部の慣習を無視して自らの身を危険に晒してまで逃亡奴隷ジムを救出しようとしたハックに共感した後で、ブーマーが象徴するようなアメリカ・ナショナリズムを重ねることは妥当であろうか。このような疑問からもう一つの読みの可能性が出てくる。すなわち、ハックとインディアンは敵対関係ではないとする反ナショナリズムの読みである⁽²⁾。

しかし、このような読みが従来主流だったとは言いがたい。それはトウェイン自身にブーマーを思わせるようなナショナリストの要素が明らかにあるからだ。1862年、南軍の兵士としてたった2週間南北戦争に参加した後、トウェインは、ネヴァダ準州の書記官に任命

された兄のオリオンとともに喜び勇んでネヴァダへ旅をする。このときの記録が *Roughing It* であるが、この動きが当時の白人アメリカ人の典型的な動きであることはディヴォウトも指摘するところである (he joined the great national movement which even civil war could not halt)⁽³⁾。このようなトウェインに照らして、*The Adventure of Tom Sawyer* や *Huck Finn* の冒険物語を典型的なアメリカ白人の物語、ハックをブーマーの一人と読む解釈が成立する。しかし、トウェインには、それほど単純に割り切れないものがある。*Huck Finn* のマニュスクリプトをその改定部分に注意しながらつぶさに研究したドイノはトウェインについて次のように言っている。

彼は、小説の形式を使って、人間性、個人主義、自由、奴隷制、宗教、識字能力、ナショナリズム、著作権法や文学についての議論を生み出していた。これらの議論が結局ははっきりしない態度に止まり、晩年における明白で痛烈なペシミズムとなっていく⁽⁴⁾。

晩年のペシミズムを形成するひとつの要素としてナショナリズムの議論を上げている点は重要だが、それ以上に注目しておかなければならないのは、このような議論が小説を書きながら検討され形成されていったとするドイノの考えである。ここで、仮説を大まかにまとめておこう。初期マーク・トウェインの作品にはブーマーを思わせるようなナショナリズムが見られる。ところが *Huck Finn* では、ハックに一貫性を持たせて読むとすれば、ブーマーの性格を持たせることはできない。したがってマーク・トウェインは、作品を書きながらナショナリズムの問題を検討し否定的な解答を引き出した。さらにこの見解は晩年のペシミズムと関係ある可能性がある、ということである。そしてこの仮説を検討するのに重要な要素として考えられるのがインディアンなのである。

そこで、マーク・トウェインの作品にアメリカのインディアン政策を読み込む作業が必要になるが、本校では初期の作品、特に旅行記 *Roughing It* を中心に取り上げ、初期マーク・トウェインのナショナリズムについて考えてみたい。

2

Roughing It が書かれたのは1871年 (出版は1872年) のことであるが、この旅が行われたのは先にも触れたように南北戦争中の1862年である⁽⁵⁾。まずはトウェインが生まれてからこの時期に至るまでのインディアンの状況から検討しておこう。

トウェインが生まれたのは1835年11月30日、ミズーリー州モンロー郡のフロリダという、ディヴォウトによれば、「インディアン・カントリーの東ほんの200マイルのところにある丸太小屋の小さな集落」であった。その後彼が4歳に満たないころ、家族は同じミズーリー州のハンニバルに移る。後にこの町が作家トウェインにとって重要な役割を果たすことになるのは周知のとおりであるが、当時この町は、「近くには2、3人のインディアンが、またさほど遠くない所には大きなインディアンの集団があったが、彼らは一つの景観であって脅威ではなかった」とディヴォウトも推定ではあろうが述べているとおり、ここにインディアンの存在を認めなかったはずはない。むしろ、インディアンと文明の交流にこ

そフロンティアの町としての特徴があったというべきかもしれない。ディヴオウトは当時のハンニバルの様子を次のようにまとめている。

ハンニバルはミシシッピ河に面した町である。ここには国際主義が連綿と流れ込み、この社会の極端な地域主義と鋭く矛盾しながらも絡まっていた。蒸気船が旅人を運び、半大陸の交易品が町の埠頭を通り過ぎる。持ち主のない大きな筏や角材が——のちにハックやジムが乗って旅をしたような——ウィスコンシンから流れて来た。みすぼらしいボートやキールボート、ブロードホーン、平底船や大型平底船に乗った運送業者や引っ越し人、単なる放浪者が彩りを添えた。また違ったタイプの人や衣装が湖水地方や北方の川からやって来た。その中には航海者あり、わな猟師あり、避寒者あり。儀式張った衣装を身につけた広野のインディアン部族が、条約を結ぶためか年金をもらいに行くところをよく見受けられた。これらすべては広がりつつある国家の急速な膨張運動の一環であった。さらに、ハンニバルは80マイル離れたセントルイスの影響下にもあった。セントルイスは、確かに帝國的な膨張のエネルギーを、サンタフェやオレゴン、カリフォルニアへ輸出していた港であった。⁽⁶⁾

このように、西にインディアン、東（南）に西部開拓の拠点セントルイスと、いわゆるフロンティアの町として自然とコズモポリタンの文明との接点であった当時のハンニバルは、言い換えればインディアンと合衆国政府の接点であったと言っても過言ではない。

もともと1803年に格安の値でフランスから手に入れたルイジアナは、その後この地を探索したゼブロン・バイクやスティーヴン・ロングの報告によって白人の入植には適さない不毛の地という観念が植え付けられていた。よってこの地をインディアンの居住地にしようという構想が生まれ、1830年のインディアン強制移住法の成立によって実行に移されることとなる。このような移住は合衆国政府と条約を結びながらなされた。強制移住法成立直後、ルイジアナの地にあったチョクトー族はダンシング・ラビット・クリーク条約を結び、不承不承土地を明け渡した後、西への移住を開始する。アラバマのクリーク族はワシントン条約を、フロリダのセミノール族はペインズ・ランディング条約を、そしてジョージアの地にあったチェロキー族はニュー・エチョタ条約をそれぞれ結び、西への旅に出た。中でも有名なのがこのチェロキー族の「涙の道」である。38年にオクラホマに向けて出発した15,000人のチェロキーのうち約4,000人が飢えと寒さで死んでいる。その経路が奇しくもミズーリ州（州昇格21年）を横切っていたことはトウェインとインディアンとの関係を考えるうえで無視できない事実かもしれない。強制移住の中で、もちろん抵抗がなかった訳ではない。中でもセミノール族の抵抗は有名であるが、他にミズーリの北にあったサック族とフォックス族も、強制移住に対してブッラク・フォーク戦争(1832年)を戦い、抵抗を試みている。しかしこれらの部族も、合衆国政府と条約を結び年金をもらってミズーリ川の西方へ移住する事を余儀なくされる。

このように、トウェインがハンニバルに移ったころはインディアンの強制移住が進行している最中であった。インディアンがハンニバルそのものを通過したとは言えないが、インディアンという言葉が社会に一定の空気を醸していたことは事実であろう。ディヴオウトの描く当時のハンニバルに、「条約を結ぶためか年金をもらいに行くところ」のインディ

アンの姿が見えるのもこの歴史的事実をよく伝えている。

さて、合衆国政府との間で結ばれた条約により、インディアンはミシシッピ河の西の地に強制的ながら新たな土地を手にした。しかし、この条約は簡単に踏みにじられることになる。1845年のテキサスの併合、翌46年のオレゴン併合、48年のアメリカ・メキシコ戦争によるカリフォルニアの獲得、鉄道敷設にからんで購入されたガズデン地区と、ほぼ現在のアメリカに近い領土を獲得すると、48年のカリフォルニアのゴールド・ラッシュにも刺激されて、西への移住はより活発になる。しかも、62年、160エーカーの土地が一定の期間耕作することによって自分のものになるとする法律ホームステッド法が、それまで北部との政治バランスで反対していた南部が連邦を離脱することによって成立したことで、この動きはさらに加速されることになった。既に西部は白人の居住に適さない不毛の地ではなく、一獲千金を夢見る輩を含めて新たな土地に注目した白人たちがブーマーとなってインディアン土地に流れ込むことになったのである。条約を結んだ政府は一定度この動きを阻止しようとしたが、止められないことが分かると傍観を決め込み、さらには積極的な排除へと政策を転換して行くことになる。この動きは1890年、フロンティアの消滅と同時く、ウンデッド・ニーの虐殺で幕を閉じる。したがって60年代からの30年間でインディアンと合衆国政府との最後の決戦となり、特に60年代後半から70年代にかけてこの戦いは頂点となる。⁽⁷⁾

以上、大雑把にインディアンとアメリカの歴史を見て来たが、トウェインの誕生からネヴァダへの旅に至るまでの歴史的背景は、そのままインディアンと合衆国政府の関係史の後半部分に当たり、ミズーリからネヴァダという地理的条件を考えても、トウェインが両者の接点にあったことは明白である。中でも1862年のネヴァダ出発が、偶然とは言えホームステッド法成立と時を一にしているのは象徴的であり、トウェインをブーマーの一人としてみたくなる誘惑がここにもある。が、本当にトウェインはブーマーだったのだろうか。トウェインが旅をしたとき既にインディアン最後の抵抗は始まっていた。そして1870年、出版社からの要請があって *Roughing It* を書き始めるまでの約10年の間に、インディアン抵抗史の最後の頂点を迎える。*Roughing It* の語りはこの事実をどう伝えているだろうか。ナショナリズムを背負った語りなのかどうか。特にインディアンとの関連で *Roughing It* を見てみよう。

3

セントルイスを起点とする *Roughing It*⁽⁸⁾ の旅は、簡単に言えばオレゴン・トレイル、カルフォルニア・トレイルの旅ということになるだろう。セントルイスから陸路の出発点セントジョーゼフへは船で、ここからネヴァダまでただひたすら西へと向かう。ララミー砦から冠雪のロッキーを眺めながらソルトレイクへ、そして目的地ネヴァダのカーソンシティに至る。ネヴァダでは、神秘的なタホ湖を訪れたり、銀鉱山を求めたりする。まさに一獲千金を夢見たフォーティナイナーズそのままである。その後サンフランシスコを訪れ、さらにサンドウィッチ諸島（ハワイ）の旅に出て、その後の講演旅行を暗示させながら旅行記は終わる。

その中で、インディアンの言及は、比喩的な使用も含めると90数箇所にはのぼり、その大

部分は、当然インディアンの活動舞台である大平原地帯を横断してネヴァダに至る前半部分に集中している。インディアンの言及には、「敵意のある」(I 52, I 57, I 58)「潜伏する」(I 57)という形容や「野蛮人」(I 57, I 64)という呼称、「インディアンによる大虐殺」(I 253)「インディアンの攻撃」(I 269)などの用語が使われ、基本的には語り手が白人側の立場に立ち、敵対するインディアンに恐れを抱いていることが窺える。特に、戦闘的なインディアンが存在するとされたブラック・ヒルズを夜に通過する際(9章)、馬車の「ブラインドをしっかりと閉め」、「まんじりともせず」、ただ「黙って耳を傾けていた」(I 58)という描写に、見えないが挑んでくるものに対する恐怖心に満たされた語り手トウェインの姿が生生きと伝わってくる。その後、銃声を聞き、激しい格闘の音を耳にしたとき、それが当地に蔓延っていた盗賊(代表的なスレインという人物が話題になっている)であるかもしれないのに、インディアンの襲撃とダブらせて馬車の中で議論されている所など、疑問を抱く語り手ではあるけれども、一般的な当時の風潮をよく伝えるものであり、その中にどっぷりつかっているトウェインを見て取ることは可能である。インディアンに対するこのような観念は、2で見て来たような当時のインディアンの動向を一方的に捉らえた意識の反映であると言ってもいいだろう。トウェインの観念の中にそれがなかったとは決して言えない。

もちろん、彼のこのような観念は、当時のインディアンに関する風評や情報が支えとなっている。それを示すかのように *Roughing It* の中では、彼自身が出会ったインディアンを彼の言葉で語っている2、3の例外を除いて、そのほとんどが他人からの情報となっているのが特徴である。先に触れたブラック・ヒルズの場面においても、その前によった駅で、その担当官が、数時間前にインディアンに対して4発撃った事を知らせた後で、馬車のルートが南部高地のアパッチ族の中を通っていたときは本当に恐ろしかった、と言う趣旨の話聞かせ、彼らが絶えず発砲するので「体は穴だらけ、『食い物を蓄えておくことができなかった位だ』」(I 58)と付け加える。トウェインは「にわかには彼の言葉は信じられなかった」とは言うものの、先のブラック・ヒルズ越えがこの後に続くことになる。またこの旅の出発に際して、兄のオリオンや同行者のベミスという人物が「インディアン対策」(I 5)と称して銃を持ち、「2700ポンドも積み込んだ郵便物」の「『大半はインディアンたちのためさ』」(I 7)と御者が漏らしているのも暗示的な情報と言える。さらに、ソルトレイクで耳にした、「マウンテン・メドーズの大虐殺」がインディアンとモルモン教徒のどちらの責任によって起こったのかという議論(17章)に至っては、「完全にインディアンの仕業」と言う意見と「ある面インディアンが悪いがモルモン教徒にも責任がある」「完全とは言えないまでもほぼモルモン教徒の責任である」(I 120)との三様の情報が与えられ、情報の恣意性が問題となっている。そしてこの問題は、数年後、ウエイツ婦人の『モルモン教の予言者』と題する本が出るまで、「モルモン教徒の責任」という事実は分からなかった、とトウェインは言う。

このように他人の語りの中に虚偽や誇張を見つけようとする、後にリアリズム作家と呼ばれるトウェインの本領がここでも見るができるけれども、しかもそれがユーモアとなって作品を支えているけれども、ことインディアンに関しては誇張された一方的なインディアン像が払拭されているとはいいがたい。そこには冒険という即時的な要素がからんでいないだろうか。そしてこの即時的な体験がある程度の否定的観念と化し、これを情報

が支えて行くという構図である。

もともとこの旅の中でインディアンは冒険の一要素として位置付けられている。その意味では極めてロマンティックな要素を持っているのである。兄オリオンがネヴァダ準州の書記官に任命されたとき、これから冒険を経験する彼に対して羨望の思いを強く感じている。

彼(オリオン)は旅に出るんだ。わたしはかつて家から離れるなんて事はなかった。だから「旅」という言葉は、わたしにとって誘惑するような魅力を持っていたんだ。すぐにも彼は、何百も何百マイルも離れた大平原や砂漠に出て、極西部の山の中に入る。そしてバッファローやインディアン、プレイリー・ドッグやヘラジカを見て、あらゆる冒険をすることになる。首をくぐられ頭皮を剥がれることもあるかもしれない。今までに経験したことのない素晴らしい時を過ごして、家に手紙を書く。その経験を我々みんなに語ってそして英雄になるんだ。(I 1)

このような思いが自分に実現することが分かると、「天地が引っ繰り返り、空が巻物のように巻かれて行くような気」がして、「一晩中、インディアンやら砂漠やら銀の延べ棒やらの夢を見た」(I 2)と、彼は冒険に夢を馳せる。さらに、このようなインディアンに対するロマンティックな考え方が、「ロマンスの甘い月光を通して赤い人を見ていた」彼自身を「インディアンの崇拜者」(I 134)であったと自ら宣言する根拠ともなる。しかし、*Roughing It* の語りの中で数少ない、彼自身の目を見て、彼自身の言葉で言及されているインディアン、すなわちゴシュート・インディアンに接すると、このロマンティックなインディアン像も「急速にペイントや虚飾が剥げ落ち」て、「ずるがしこく、不潔で、むかつくような」(I 134)インディアン像へと修正されてしまうのである。このゴシュート・インディアンは「今までに見たこともないような野卑な人間」と言及され、「顔や手には泥をつけ」「無口で、こそこそと動き回り、ずるがしこく」「自尊心もないような乞食」「いつも空腹で」「豚もいやがるようなものも時には口にする」「野蛮人」(I 132)であるとその特徴を挙げつらう。そのあげくには、

どこでインディアン部族に出会っても、多かれ少なかれ環境によって修正されたゴシュート族を見ているに過ぎない。結局ゴシュート族なのである。彼らは哀れむに値するかわいそうな生き物だ。だからわたしも彼らを哀れむ。ただしこれだけ離れていればのこと。もっと近くにいれば誰も哀れみはしない。(I 134)

とインディアン全体をくくりそうな勢いである。こうしてインディアンに対する即時的な否定的観念が生まれる。この観念は1869年に出版された *The Innocents Abroad* にも顔をのぞかせている。イタリアのコモ湖とアメリカのタホ湖を比較する際、タホの名付け親であるディガー・インディアンについて次のように語っている。

あの退化した野蛮人は、自分たちの死んだ近親のものをあぶり焼き、人体の脂と骨粉とをタールにまぜて、それを厚ぼったく、頭と額と耳とに一面に「塗りつけて」、

山また山をいがみ声を発して駆けずり回り、そしてそれで、哀悼の意を表しているのだと称している。⁽⁹⁾

さらに、

わたしは「赤色人の門閥家」と知り合いの仲だ。で、彼らと一緒に野宿したことがある。供に戦闘に出陣したこともあり、彼らの狩の仲間入りもした——もっとも狩と言っても、バッタ狩であったが。彼らに手引きして、家畜を盗ませてやったこともある。わたしは彼らとうろつき回り、彼らの頭皮を剥ぎ取り、朝食に彼らを食べた。機会さえ与えられたら、きゃつ等の一種族くらい、ペロリと平らげるのはなんでもない。⁽¹⁰⁾

ここまでくると明らかに諧謔の要素がはっきりと見て取れ、インディアンに対する否定的観念をそのまま受け取ってよいかどうかの問題はあるだろう。

確かに *The Innocents Abroad* や *Roughing It* を書いたときのトウェインにインディアンに対する否定的観念があったことは事実である、と見なければならぬだろう。しかし、だからと言って、ロマンティックにはあれ自分は「インディアンの崇拜者」であるとするトウェインが、否定的観念一色に染まっていたと見るのも危険である。例えば *Roughing It* の中で、60人の兵士と400人のインディアンが対峙しているとき、始めは兵士につこうと思ったトウェインが、「400のインディアンがいることを考えて、我々はインディアン側につこうと決心した」(I 90)と語れば、インディアンに対する彼の立場はそれほど明確なものではないと結論しなければならないだろう。インディアンに引かれる面と否定的観念に捉られる面と両方に引き裂かれたトウェインの姿が浮き彫りになるのではないだろうか。

4

以上のようなあいまいなトウェインの姿の背後には、やはり冒険好きでしかもユーモア作家となったトウェイン個人とそれを可能にしたアメリカへの彼の思いがあると思われる。

先に引用した *The Innocents Abroad* の一説からも分かるように、トウェインの諧謔は、一度対象をできるだけ引き離し、それを客観的な目で見つめた後で今度は誇張とも取れる主観的な言葉をそれにかぶせるものである。そこに彼の作品のおもしろさがある。そしてこのユーモアが、*The Celebrated Jumping Frog of Calaveras County* (1867) と *The Innocents Abroad* で彼を一躍有名にしたのも事実である。*Roughing It* の場合も、ことインディアンに限ってみても、このような諧謔の操作が行われている。冒険という現実の中でインディアンを対象化し、それをできるだけ引き離して客観的に見つめる。そしてそれを主観的な言葉で語って見せて旅行記という形を成す。ときには客観的事実が主観的な言葉を支えられないことがある。他人からの情報がこれに当たるだろう。逆に主観的な言葉が客観的な事実を支配してしまうこともある。ゴシュート・インディアンの描写などがこれに当たると言える。

いずれにしても、この両者の関係がトウェイン特有のアメリカ的ユーモアを形成していることは事実であろうが、さらにこの関係に時間の問題も加わる。実際に旅をしたのは1862年であるが、これを書き始めたのは1870年である。記憶の薄れから主観的な言葉が客観的事実を凌駕してしまうのは仕方がないかも知れない。しかし裏返してみると、この8年の中にも新たな歴史的事実があり、この事実が8年前の客観的事実に新たな光を当てることもあるだろう。具体的に言えば、この間にインディアンたちの最後の抵抗が頂点に達するのである。

一方、ユーモア作家としての顔の裏には冒険好きなトウェインの姿があり、これを支えてくれるアメリカの存在がある。銀鉱を掘り当てようとする彼の姿に、一獲千金を目指したフォーティー・ナイナーズの姿をそのまま見ることができる。それは1840年代の領土拡張がなければ果たせなかった事実であろう。したがって、トウェインの中にナショナリズムはしっかりと位置づいている。しかし、やはり彼は冒険好きな作家なのであり、新たな土地に定住して行ったブーマーではなかったと言えるだろう。

Roughing It に見られる語り手の曖昧さは、まだトウェインがナショナリズムの問題まで行き着いていないことを物語っている。ドイノの指摘にあるように、この問題は小説の形式で生まれてくるのかもしれない。これについては稿を改めて分析することにする。

注

- (1) Mark Twain, *Adventures of Huckleberry Finn* (Norton, Second Edition, 1977) p.229 ハックのテリトリー行きの暗示は、さらなる冒険を求めるトムのような提案から引き出されたもの。したがって、ahead of the rest という4語はトムたちと考えるのが至当。
- ...le's all three slide out of here, one of these nights, and get an outfit, and go for howling adventures among the Injuns, over in the Territory, for a couple of weeks or two...
- (2) ハックのインディアン・テリトリー行きに注目した論文に Roy Harvey Pearce の "The End. Your Truly, Huck Finn": Postscript (*Adventures of Huckleberry Finn*, Norton, Second Edition, 1977, pp.358-362) があるが、基本的にはハックをブーマーの一人と読もうとするものである。
- (3) Bernard De Voto, "Mark Twain and the Great Valley" Harold Bloom ed., *Mark Twain* (Chelsea House Publishers, 1986) p.10
- (4) Vivtor A. Doyno, *Writing Huck Finn* (University of Pennsylvania Press, 1991) p.32
- (5) Albert Bigelow Paine, Introduction to *Roughing It* (Writings of Mark Twain, Vol. 3, Hon-no-Tomosha, 1988) p.xix
- (6) Bernard De Voto, "Mark Twain and the Great Valley" p.11
- (7) インディアンの歴史については、次の図書を参照にした。有賀貞他編『アメリカ史』1 (山川出版社, 1994), 清水知久『米国先住民の歴史』(明石書店, 1993), 富田虎雄『アメリカ・インディアンの歴史』(雄山閣, 1990), ロナルド・ライト『奪われた大地』(香山千加子訳, NTT出版, 1993)
- (8) Mark Twain, *Roughing It* (Writings of Mark Twain, Vol.3,4, Hon-no-Tomosha, 1988) 本稿ではこのテキストを使用し、以下の引用はVol.3をIと表記し、その後にページ数を付けて表す。
- (9) Mark Twain, *The Innocent Abroad* (Writings of Mark Twain, Vol.1, 2, Hon-no-Tomosha, 1988) Vol.1, p.205 なお訳は『赤毛布外遊記』上下 (岩波文庫, 1977) の浜田政二郎訳を使わせていただき、部分的に修正を加えた。
- (10) Ibid., Vol.1, p.205